

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2014年1月20日

43号

発行者 鈴木 克彬
発行所 ぐんま日独協会
〒371-0105
群馬県前橋市富士見町石井 2445-219
電話 : 027-288-4297
E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



クリスマスの集いで全員合唱

1. ハイマート 43 号に寄せて (会長のことば)	2
2. 独日フォーラムに参加して	3
3. 北軽井沢ディナーパーティ	4
4. クリスマスの集い (1) (2)	5~6
5. ドイツ人ホームステイ体験記	7~8
6. 「ハイマート」に寄せてードイツからの寄稿ー	9~11
7. デザイナー修行奮闘記 (連載ー3)	12

1. ハイマート 43 号に寄せて — 会長 鈴木克彬

明治10年,群馬で幼稚園教育について講演した ドイツ人女性 松野クララさん

・ ・ 文中の敬称は略します ・ ・

群馬県立文書館（前橋市文京町）の保存資料、群馬県学務課考積録明治10年（1877年）の項に、次のような文書が保存されていました

『東京女子師範学校幼稚園保母松野クララを招き、桃井学校に於て8月6日より同8日迄、高崎学校に於て同9日より10日迄、幼稚園開誘式を行い、且幼稚園設置の要旨を演説せしめ、衆庶をして参観せしむ。之に因て省志の輩、幼稚園教育に最も大益あることを主唱し、或いは出京して親しく之を参観し衆庶を勧誘するに至れり』

この文中にある松野クララ（1853年ベルリン生）は、明治当初の日本人留学生松野礪（ハザマ）とドイツで知り合い結婚した人です。

注 ・ ・ 松野礪は明治3年渡独、同8年帰国、即内務省で山林関係の仕事に従事した人で、日本山林学の祖と云われています。

特筆すべきことは、明治6年訪独した岩倉使節団は、ベルリンで松野礪と面談しドイツの山林学について話し合っていることです。具体例として、使節団の渡欧日記のドイツの項に、“松野の話を聴いた大久保は卓を叩いて喜んだ”とあります。推測ですが、クララもその際、使節団の幹部に紹介されたかも知れません。

そして明治9年、群馬県知事となった楫取素彦は、群馬での教育振興、レベルアップを目指し、長州の関係者を通して、同10年に松野クララを群馬に招聘したのではないかと思います。クララは当時、妊娠6カ月という状態で、暑い季節相当無理をされたのではないかと察せられます。

残念ながら、幼稚園設立のための講演結果はすぐには実らず、実際のスタートは7～8年先になったようです。

追記 ・ ・ 松野クララの墓は、ご主人松野礪とともに東京青山の外国人墓地にあります

以上

*事務局註：群馬テレビにて原則毎月第1火曜日 18:00 より鈴木会長がコメンテーターとして日独に関する各種テーマについてお話しています。是非ご覧ください。

2. 独日フォーラム『第3次メルケル政権のゆくえと日独の関係』

・・・アデナウアー財団主催のセミナーに参加して・・・（鈴木 克彬 記）

平成25年12月10日（火）東京のANAビルで行われたフォーラムに参加しましたので、その概要を報告します。

日時 平成25年12月10日（火） 18:00～20:30

場所 東京都溜池 ANAビル内 会議室

主催 アデナウアー財団日本事務所

出席者 ヘルツブルク 駐日ドイツ大使館臨時代理大使

クレフト ドイツ外務省海外との学術文化交流特別代表

神余（シンヨウ）元駐独大使

三好 読売新聞国際部編集委員

テーマ 第3次メルケル政権と日独関係のゆくえ

内容

- 1 この秋行われた総選挙で、メルケル首相率いるCDU（キリスト教民主社会同盟）は第1党になったが、過半数には至らなかった。そこで現在SPD（社会民主党）と連立政権を組むため、現在両党間で“連立協定書”を策定中である。
- 2 その協定書は185ページに及ぶ膨大なものであるが、今日では殆んど合意されているので、その内容から今後の方向性を伺い知ることが出来る。（注記・・・その後12月17日連立政権は成立した）
- 3 その内容は、少子高齢化、社会保障、最低賃金、母親年金、エネルギー、移民、人口減、財政秩序対策等、多岐にわたっている。・・・現在日本が抱えている課題と殆んど同じ、と私には思われた・・・
- 4 その中で外交についても触れられているので触れてみたい。
 - 4-1 一番強調しているのは、“国際的ルール、秩序の保持”である。
 - 4-2 そして、日本をアジアの中で、一番信頼出来るパートナー・友好国として位置付け、EU、アジア内でともに経済力を付け、世界経済の牽引車としての貢献を期待している。
 - 4-3 一方、国際ルールを守らない危険性のある中国、インド、ブラジル等新興国に対しては、“戦略的パートナー”として友好関係を結んで行きたい、としている。
 - 4-4 アメリカの東南アジアへの関与は歓迎している。
- 5 その他の質問、話題
財政問題ではドイツ側も深刻で、道路、橋などの保守管理が必要な公共工事が後まわしになっている等、日常生活への影響も徐々に発生しつつある、との発言があった。

以上

3. 「ドイツフェスタ2013」での北軽井沢ディナーパーティ（對馬 良一 記）

ホテルグリーンプラザ軽井沢で、今年で5回目を迎える「ドイツフェスタ2013」が開催された。期間は11月1日から12月25日までの55日間でこの期間中は、ホテルはドイツの催しものなどで賑わった。

11月9日（土）・10日（日）ぐんま日独協会は、鈴木会長夫妻のほか高崎経済大学の交換留学生等3人を含む10名が参加しフェスタを盛り上げた。

ドイツ民族音楽で、アコーディオン奏者ボルフガンク・ホルツレ氏の演奏会場は歌、踊りで大賑わいでした。アコーディオン歴40年のホルツレ氏は、巧みな演奏技術と話術でみんなを喜ばせていました。終了後は、高経大交換留学生、ダビット・マルクス君やクリストファ・ノル君達と、夜遅くまで部屋でビールを飲みながら歓談していましたが、彼らにとっても良い勉強になったと思う。

当日、浦野氏は宿泊できず、長野の自宅に帰宅されたが、会長夫妻と新井、大野、對馬の諸氏も遅くまでドイツ談議などで親交を深めた。

当日は天候が悪く、ぐんま日独協会として、ブースを出す予定でしたが中止せざるを得なくなり、また、新しくオープンした欧州雑貨ハウス Cachecache（カシュカシュ）も天候に勝てず早めに閉店したのが残念でした。しかし、ご馳走になったホットワインは体が温まりとても美味しかった

外は荒天模様でしたが館内は熱気に溢れ、若い人たちで大混雑でした。特にドイツのおもちゃギャラリーには、お子さん連れのお客さんで賑わっていた。ドイツ職人が作る芸術的な伝統工芸品に子供たちの瞳はきらきらと輝いていた。以前は中国人が多かったが、現在は台湾人の若者のほうが多く目立っていた。客室440（約1500人）もほぼ満員でホテルの人気の高いのが分かる。

とても残念だったのは、ホテルグリーンプラザ軽井沢に大集合予定だった、1960年代のフォルクスワーゲンビートルの雄姿が見られなかったことでした。

コネクション館には、ぐんま日独協会オリジナル製作「岩倉使節団その意義と役割20枚パネル展」や、ロマンチック街道パネル展、館内各所には日独両国の旗がホテル内に掲揚されドイツ一色に包まれていた。

今年で5年目を迎えた「ドイツフェスタ」も、日本ロマンチック街道とドイツロマンチック街道姉妹締結事業など、ドイツと日本の文化的・人的交流に、ぐんま日独協会も協力できたことは喜ばしいことであり、これからもホテルとともに、ドイツとの交流事業をより深く、広く関与し日独交流に寄与していきたいと考えている。

4. クリスマスの集い

4-1. 楽しかった「クリスマスの集い」(大野 寿彦 記)

12月21日(土)に、前橋夢スタジオで、会員有志による「クリスマスの集い」が開催され、50名あまりの会員とご家族の方々が参加されました。『会員が中心』になって楽しめる集いが、これまでになかった事から、今回のようなクリスマス会が初めて企画されました。企画・会場設定・運営、更には、会の出演者・聴衆すべてが、ぐんま日独協会の会員、というまさに手作りの『集い』でした。



【会長挨拶】【来賓挨拶ー県国際戦略課斉藤係長】



【多彩な各種出し物】



クリスマスとドイツに因んだ音楽が中心に置かれたサロンのなくつろいだ雰囲気の中で、音楽の部では、ピアノ、バイオリン、ヘルマン・ハーブ、フルートなどの演奏や、ドイツ・リードの歌唱を聴くことができ、更には、今は懐かしいSPに録音された音楽も鑑賞できました。プロの演奏・歌唱ばかりでなく、セミプロ・趣味の方々の演奏・歌声にも、大変心に打たれるものがありました。

音楽に傾聴していた耳を休めるのに、いろいろな余興も織り込まれ、指笛と詩吟が交互に歌唱された「荒城の月」、初めて耳にした言葉『ボイス・パーカッション』が何かもわかり、また、その演奏(?)を聞いて、これも「才能だな～」と変な感心をした次第です。



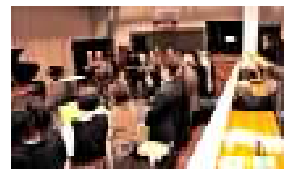
余興の中で、会場全体を沸かせたのは、プロではないかと思われる對馬副会長の手品です。カードの手品、紙幣を発行する手品・・・、タネが分からないままに終わりましたが、すべての演目がドイツに因んだものだったので、今回は、手品で作るお金も、日本国の千円札ではなく、ユーロ券でお願いします(笑)。

鈴木会長ご夫妻が軽快にバイエルンとチロル地方のフォークダンスをご披露され、集いを一層、盛り上げて下さいました。



偶然隣に居合わせた、沼田から来られた川田さんご夫妻も、出演者皆さんの多才振りに驚かれておりましたが、私自身も皆さんの幅広い、且つ、レベルの高い才能に感心しました。

予定の 12 演目を見たり、聴いたり、笑ったりしている間に、楽しかった時も進み、参加者全員が『ドイツも私のハイマート！』の気分で、聖夜 (Heilige Nacht) と別れ (Abschied) を合唱して、閉会の運びとなりました。



群馬県全体の日独協会会員の交流を図るためにも、これからもこのようなイベントがあればよいと思います。会長をはじめ、運営役員の皆様、出演者の皆様、どうもありがとうございました。

4-2. 「クリスマスの集い」一心にあかりが灯るようなー (矢内 史 記)

師走 21 日、「クリスマスの集い」に参加させていただきました。日頃ご無沙汰を重ねている私ですので、せめて集いに参加し、皆様と久闊を叙することができたらと願い出かけました。

会員の方々はそれぞれにチャーミング。ある方は好奇心に満ち溢れ、ある方は知的な雰囲気身を纏い、またある方はユーモアたっぷり。ドイツを愛し、異国を眺めた視点で祖国を洞察する、という手法を私はドイツサロンで学び、サロンに出席する度に、心地よい刺激を頂いてまいりました。今回も皆様とのちょっとしたやりとりは、味わい深く興味深いものでした。



【多彩な各種出し物】

会員の多士済々ぶりは承知してましたが、それにしても皆様多才で・・・歌、楽器の演奏、ダンス、手品等いつものサロンコンサートとは一味違う多彩な演目に感嘆しました。出演者が楽しみながら歌い、踊り、演奏し、その楽しさや喜びが観客にさざ波のように伝わるという幸せな体験をいたしました。



ドイツのクリスマスは家族が集う心安らかな祝日。日本のそれはクリスマスケーキとプレゼントが飛び交う賑やかな日。日独協会の「クリスマスの集い」とは両者とも異なる和やかなな **Treffen** でした。心が暖かくなるような、心にあかりが灯るような集いでした。



【会員のお子様のかわいいパフォーマンスも！】

5. ライマー夫妻前橋滞在の記 (平方 秋夫 記)

ライマー夫妻の来日計画は、今から3年前、とちぎ日独協会の橋本孝会長からの依頼で對馬副会長の紹介によって、私達がホームステイのホストファミリーをお引き受けしたことから始まります。お二人は一昨年春には来日の予定を立て、私達とメールによる情報交換が始まりました。

ところがご承知の通り、東日本大震災により彼らの来日の予定は立たなくなっていました。勿論最大の要因は福島第一原発の事故であることは言うまでもありません。当時、ドイツ大使館の業務は関西に移転し、近隣に住むドイツ人は全て帰国するという状況にありました。そしてドイツ本国では、日本への旅行は殆どの方が取り止めることになりました。彼等もまた例外ではありませんでした。しかしこの間、私たちのメール交換は続き、お互いの情報交換、時季のプレゼント交換等々の交流を通して既に旧知の仲のようになりました。そして漸く今回の来日に至ることが出来ました。今年の8月には奥さんのヘルガさんの定年退職を機に来日を計画したとのことでした。

まず最初に、ライマー夫妻のこの度の旅行の概略を紹介します。10月24日に成田に到着、11月7日に離日してオーストラリアに向かいました。11月下旬にはニュージーランドへ移動、現在(12月19日現在)は南島クライストチャーチ付近でトレッキングを楽しんでいます。今後ハワイに移動してクリスマスと新年は、息子さんと合流しハワイで過ごす予定、その後アメリカ・サンフランシスコに移動、半月程度滞在后、ドイツへ帰るのは1月下旬の予定と聞いています。約3か月間の世界一周旅行になるそうです。

彼等の持っている航空券は世界一周チケットで、1年間の有効期間を持った割安のチケットです。

次に日本(前橋)滞在中の日程を紹介します。

10月24日(木) 8:55 成田着。空港まで出迎え。列車で前橋へ。

25日(金) 歓迎パーティ。高橋忠夫さん応援に来てくれる。



【早くも和気
藹々の歓迎パ
ーティ】

26日(土) 群馬交響楽団定期演奏会。

27日(日)~28日(月) 宇都宮の橋本先生宅訪問、
鬼怒川温泉(泊)、日光観光。



【日光にて】

29日(火) 卯三郎こけし、県庁等、前橋市内案内
30日(水)~31日(木) 東京、横浜(泊)、鎌倉を案内



【横浜中華街にて】



【草津温泉にて湯もみ体験】

11月1日(金) 近藤基晴さんご夫妻が二人を草津・軽井沢方面へ案内してください。



【紅葉の軽井沢雲場池にて】

2日(土) ぐんま日独協会ドイツサロンに参加。

3日(日)~5日(火) 長野・松本城、蓼科(泊)、富士山を見るために、河口湖(久保田一竹辻が花美術館)、山中湖(泊)、湖畔散策、



【快晴の富士山を背景に】

6日(水) 和食のお別れ会

7日(木) 車で成田へ送る。夕刻離日。オーストラリア・シドニーへ

ライマー夫妻はとにかく常時パワフルで、何にでも興味を持ち、日本を知り尽くそうと努める姿勢に頭が下がる思いでした。群響の定期演奏会(曲目は、スメタナの「わが祖国」全曲)では素晴らしい演奏に感激していました。宇都宮の橋本先生(宇都宮大学名誉教授・とちぎ日独協会会長)を訪問時には、再会を本当に喜んでいました。私達は古き良き日本について少しでも知ってもらうための日程を組み、日光、鎌倉、松本、そして富士山と案内をしましたが、何処でも何に対しても大きな関心を示して、とても楽しそうな様子でした。

二人はこの日本滞在をとっても喜んでくれました。そして日本を離れてから何回かメールで日本が懐かしいと現地の報告と同時に伝えてくれています。私達としてはもっと紹介すべきものがあつたのではないかと、あそこも見せたかったと時々考えてしまいます。次回チャンスがあれば、京都・広島へ案内するつもりでいます。

最後に一つ、ライマー夫妻の半月に亘る滞在中の経費のことについて前もって次のような合意を得ていました。この期間中我が家の中でかかる費用は一切不要。ただし一緒に外出した時の費用、ホテル等の宿泊費、レストラン等の食事の費用、入場料他、そして公共交通機関の運賃について、自分たちの分は負担してもらうというものでした。車のガソリン代については、私達も一緒に楽しんでいるわけですから、負担してもらうことを控えました。

そして2014年6月、私達はベルリンを訪問することを約束し、ドイツ訪問時には、今回と同様にすることになっています。いまからその日を楽しみにしている所です。

6. 「ハイマート」に寄せてードイツからの寄稿ー（ドイツ・マンハイム在住大和田邦子記）

新年あけましておめでとうございます。今年は午年。ドイツでは馬の蹄鉄は幸運のシンボルで、今年はおめでたい年です。皆さまも少なくとも4つの幸運が得られますよう、お祈り申し上げます。



【マンハイムのシンボル・水道塔
Mannheimer Wasserturm】

ドイツで毎年開かれる独日協会連合会で鈴木さんにお会いしたのは、かれこれ5, 6年前だろうか。会場をうろうろしていたら、見知らぬ日本の男性が突然「すみません、ちょっと訳していただけますか」と声をかけてこられ、ドイツ人とのお話を訳したのがきっかけで、連合会でお会いする度に情報交換をしてきた。主人と一緒にドイツサロンにおじゃましたり、スカイプでサロンの皆さんとお会いするなど楽しいひと時を過ごさせていただいている。



【マンハイム旧市庁舎】

さて、ドイツ滞在も長くなると、日本と比較して、こうあるべきだ、とか、どうしてこんなのだろう、と思うことがだんだん増えてくる。そこで「日本と違うドイツの世界」と題し、私が見たり聞いたりしたことを思うままに綴ってみることにする。私の周りにはある環境は限られているし、自然と自分が好む環境を追うことになるので、必ずしもすべてが万事以下の通りではないだろうと思うし、現在の日本すべてを知っているわけではないので、誤った見方をしていたらご容赦いただきたい。私が一番関心を持っている「日本と違うドイツの教育」については、いつか書いてみたいと思う。



【Mannheim Schloss マンハイム宮殿】



【市の紋章】

テレビと報道

ドイツに来てすぐ、テレビ番組が日本とずいぶん違うことに気が付いた。とにかく真面目だ。日本のようなエンターテインメント、つまり見て楽しんで面白かった、で終わりのような番組は見た限りではとても少なかった。もちろん、ドラマ、歌番組もあり、クイズもスポーツ（サッカーがメイン）もあるが、時間数にしたら日本よりはるかに少ない。多くの番組は学問的視点に立って分析、解説したもの、現代の政治、社会の問題点についての討論（最近特に多い）、世間や会社の不正、不道德、犯罪を分析し、責任を追求したレポルターージュ（これも最近多くなった）、ドキュメンタリーなどである。当初はドイツ語もほとんど分からなかったから、内容は全く理解できなかったが、将来少しは理解できることを予想して、知



【地元テレビ局ライン・ネッカーコミュニティ放送
をしている旧消防署】

識が身に付くチャンスだと思い、嬉しくなった。人間は生涯学ばなければならない、とはドイツでも盛んな生涯教育のコンセプトである。知的好奇心は一生持つべきだ。私は日中は全くテレビを見ない。一度、どんな番組があるのか興味本位で見てみたら、やはり真面目な、同じようなテーマの内容が目についた。日本の、いわゆる奥様番組はなかった。奥様番組も時には役に立つかもしれないが、主婦傾向に走りすぎているような気がする。住民がグループを作って助け合ったり、アイデアを出し合って共同作業をしたり、地域の活性化を図ったりしているなど、良い意味で発展性のある、生活と結び付いたネットワークに関する報道はドイツでも必要なのではないかと思った。

ニュース

ニュースもかなり違う。センセーションや事故、災害、スポーツ、天気予報を扱う時間が非常に少ない。内容は国内政治を筆頭に、EUやアメリカの動き、近隣国との接触、他国内戦や軍隊派遣地域に関するものについてがほとんどである。伝えるべき内容を手短かに的確に、また客観的に報道するテクニックはすごいと思ったので、一回のニュースでいくつテーマを扱うか数えたことがあった。夜8時の15分のニュースでは天気予報を抜かして10個だった。大きな問題や災害があると、ニュースの時間内ではごく短く報道し、ニュースの直後に特別番組を組むが、せいぜい15分ぐらいである。前回日本にいたときは大きな台風が来ていて、一日中台風の報道ばかりで、しかも同じ画像、解説の繰り返しがほとんどだった。その必要性が本当にあるかどうか疑問である。主人は、「日本のテレビは、スポーツ、天気予報、センセーション、料理番組でできている」と（ちょっとオーバーだが）言っていた。ということは、ドイツはそれらが少ないという意味である。

天気予報

ニュースの終わりに数分のみ。その他の時間にはない。ドイツで天気予報の回数が少ないのは国民嗜好なのか。ドイツ人は雨の中を濡れて歩いても平気だし、洗濯物も地下室などに干すため、今日がどんなお天気になるのかはどうでもいいのかもしれない。また冬に「今日は寒いね」というと、「冬だから」と当然のように言う。なるほど。お天気が話題になることは少ないし、展開するテーマではない。ドイツではせいぜい4日後の予報しかできないようだが、日本の週間予報やその日の時間ごとの降水確率、花粉情報（ドイツも最近導入した）、洗濯に役立つ情報はまさに至れり尽くせりとしか言いようがない。



大人の世界

ドイツに来たばかりの時は、あるドイツ家庭に下宿していた。そして、ドイツは大人の世界だと思ったことがあった。そのうちではよく誕生パーティーがあり、親戚や友達が集まった。プレゼントとしてケーキを焼いてくる人が多く、テーブルにケーキがいくつも並ぶことになる。大人の誕生パーティーだが、一緒に来た子供は子供だけの席に座る。つまり、大人は大人で話をし、子供は子供同士で食べたり遊んだりし、大人の席にはほとんど

行かない。大人は子供が寝てからコンサートなどを楽しみ、お酒も飲めるし、車も運転できるなど、子供にとっては羨ましいことが多く、子供は早く大人になって、大人の仲間入りをしたいと思うようだ。大人は大人であることの特権を楽しんでいるように見える。ドイツニーランドのように子供向けのものに大人が興味を示すことはない。

誕生パーティー

誕生パーティーのことが出たので一言書いてみたい。ドイツでは誕生日を迎えた人が人を招待して祝う。今日まで命を授けてくださった神に感謝する意味だ、と説明した人がいた。特に「0」がつく年（例：30歳、40歳、50歳、、、）になった人は盛大に祝う。その人にもよるが、何10人も招いて昼前から夜中までのパーティーもあり、昼食、コーヒータイム、夕食まで用意されることもある。だいたいホテルではなくて、公民館や、プライベートの施設を借り、ケータリングを利用し、余興としてバンドや手品を頼んだりできる。何もしない人ももちろんいる。

結婚パーティー

ドイツにもまだ慣れていないころのことである。ある夏、結婚パーティーによばれた。何を着て行こうか。持っている服も限りがあるし、ドイツの服は気に入らないし、本当に困った。当日、主人が全然フォーマルな服を着ないので、私は驚いて「そんな服で行ったら失礼だ」と言ったのだが主人は頑として聞かない。仕方なく私もそれに見合った、いつもより少しだけおしゃれな服を着て行った。着いたところは広い空地のようなところでまぶつくり。人がたくさんいて、主人は友達である花婿に挨拶したが、全く普通の服を着ている。よく見たらわきにバーベキューを焼いている人がいた。その友達のお父さんだった。そのお父さん、真夏の袖なしシャツに半ズボン、サンダル姿で2度まぶつくり。すべてセルフサービスだったがとても和やかないいパーティーだった。このとき、外見にこだわらない良さを初めて知った。盛大な結婚パーティーももちろんある。

アイドル

アイドルとは大体タレントや有名人のことだが、それにあこがれる日本人はとても多い気がする。ドイツにもそれらしい人はいるが、あこがれる人の割合は、日本の10分の1もいるかどうか。私はブランド商品もアイドルの一種だと思っている。私は昔から、ブランドもののバッグは小柄できゃしゃな私には大きすぎてごっつい（おまけに異常に高い）、と思って買ったことがない。普通知られているブランド名も知らない場合があるが、ブランドが話題になるときは「私はあまり知らない」と言うことにしている。ドイツ人は有名だから買う、とか、流行だから使う、とかではなく、自分に似合うから、とか、よさそうだから買うのだ。自分の意思ではなく、他の意見に左右されることなく行動すれば無駄がなく、あとで後悔することもほとんどない。自分の考えを持つことがここでは大切なのだ。

以上、私が今まで見聞きしたこととコメントを書いたが、まだまだ書ききれず次回に回すことにしたい。

7. デザイナー修行奮闘記 — 連載 3 (井上 晃良 記)

留学への決意

その頃定期購読していた自動車デザイン雑誌に新しく開講された西ドイツで初めての美術大学のトランスポートデザイン学科についての記事が掲載されていた。当時トランスポートデザインで留学する場合、北米パサデナにあるアートセンタースクールかイギリスのロイヤルカレッジオブアートの2校が有名であった。しかし、その2校共西ドイツではない。時をほぼ同じくしてアートセンタースクールのスイス校が開校した情報も入ってくるようになった。つまり、もう一度大学で勉強するのが私自身には最も良い選択なのではないかと感じ始めたからである。

当時は世界的に自動車産業がデザイン部門を拡大していた時期でもあり、日本にも自動車デザイン専門学校が幾つも出来たりしていたのである。今のように留学する事自体がそれほど多くはなかった時代であるから留学の斡旋会社もなく、雑誌で見た西ドイツの美術大学に手紙を書き、入学の可能性についての質問とドイツ語学校の西ドイツ現地校への手続きを進めたのである。やはり西ドイツで大学に留学するのはドイツ語が必須である。入学に必要なドイツ語能力試験があり、私の通っていた語学学校でその試験が受けられるのは都合が良かったが、その試験をパスするには能力的に厳しかった。そこで会社を辞めて西ドイツに渡り、語学留学することを決意したのである。つまり、ドイツの語学学校でドイツ語の受験資格を取り、大学から入学許可をもらうこと。これが私の取りあえぬ目標と進むべき道筋となったのである。

最後に私の母校の教授にこの相談を持ちかけた。先生は、私の留学に賛成してくれたのである。何故かそのような時は、同じような事柄を見聞きするもので、時のJIDAの会報に「若者よ留学せよ」という文章が掲載され、デザイン学生に留学を勧める主旨の文面が掲載されていた。当時の自宅がJIDAの事務局に近かったこともあり、しばしばJIDAのイベントや会合に出掛けていたのだが、何かの会合の懇親会でたまたま隣に座った方がその文章を記したデザイナー氏で、私の留学計画に多いに賛同して頂いた上に、彼自身が留学経験のあったこともあり、その後事務所にも招かれて沢山のお話を伺う事が出来たのである。また、西ドイツ留学経験のあるデザイナーの方も紹介くださり、その方からも様々なアドバイスを頂けた。1960年代に西ドイツ留学をされたピアニストの方にもお会いすることが出来た。この方とは、今でも親交がある。この時は、目に見えない力が私の西ドイツ留学を後押ししてくれていると感じたものである。

とは言ったものの、それまでの親の保護下と企業内の安定した生活から何もない西ドイツの生活へと移るのは、大きな岐路でもあり私自身は失敗が許されない決断でもあったわけで、それを考えると不安で眠れない夜もあったのは確かである。ただ、私の留学を知っている友人は、心から私を応援してくれたので本当に心強かった。人生の岐路は幾つかあると思うが、今迄の生きていた中で、私にとっては、この時の決断が最も大きかったと思う。若かった私は、どうしても西ドイツのデザイン教育を受け、その本質を知りたかったのである。企業に残って仕事を続けるのも1つの生き方ではあるが、敢えてリスクではあるがやりたい事に挑戦してみたかったのである。自分自身で決断して進む道である。もし失敗に終わってもそれを後悔することはないであろう。それよりチャンスがあったのに企業に残ってそれを後で後悔する方がイヤであった。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)